令和３年度　学校だより（No.３）　　令和３年５月３１日

６月号　鳥が丘　横浜市立鳥が丘小学校

事実を多角的に見る

副校長　　尾澤 佳彦

今年は、全国的に平年よりも入梅する時期が早いようです。いつもなら６月初旬が梅雨入りの関東地方にも、もうそろそろ雨ばかり続く季節がやってきそうです。

梅雨と言えば、湿気が多くて洗濯物が乾かない、食べ物の管理にも気を使う、外に出られない子どもたちは家の中で大騒ぎ…、そんな鬱陶しいイメージではありますが、逆に全然雨が降らなければ、夏の季節の渇水につながりかねません。梅雨の雨は、恵みの雨でもあるわけです。

自分を振り返ってみますと、子どものころは雨を楽しんでいた気がします。長靴で水たまりの中に入るのが大好きでした。その水たまりに浮かべた笹舟が雨粒にあたって揺れるのを眺めていた記憶もあります。雨の中、紫陽花の葉やブロック塀にいるはずのかたつむりを探して、何時間も外にいたこともありました。決して、鬱陶しいとは思っていなかったような気がします。大人になった今では、「また雨か。」とげんなりしてしまいますが…。

本校の子どもたちも、傘をさしながら雨の季節を楽しんでいるようです。植物の葉が雨にうたれて揺れているのを眺めていたり、水たまりの水面に広がる雨粒の波紋を興味深げに眺めていたり。もちろん、外で遊べないので残念そうに空を見上げている子どももいます。

「梅雨」という一つの事柄でも、見る方向が違えば様々な感じ方があることに気付きます。固定概念にとらわれずに、事実に対して多角的な視点を持つこと。これが柔軟な発想につながり、ひいてはよりよい人間関係を築くことにつながっていくのではないでしょうか。

まず、我々教職員が多角的な視点をもち、自分の固定概念にとらわれることなく、子どもたちとの関係をしっかりと見つめていきたいと思います。そこで新たな発見をし、日々の指導・支援に生かしていくことが、本校が子どもたち一人ひとりにとっての「せかいいちの学校」になるために必要なことだと、そう思います。